

図書館だより

愛知教育大学附属図書館

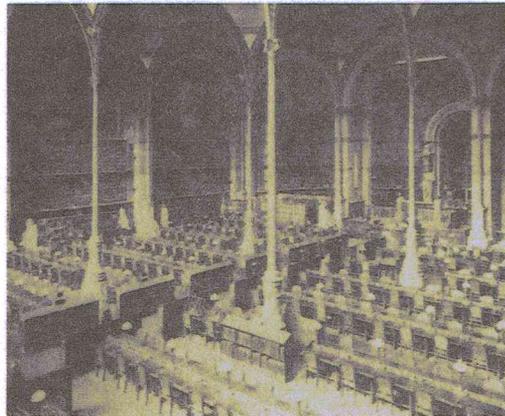
第9巻 第3号(通巻34号) 平成3年11月

フランス国立図書館で.....	1
資料紹介.....	3
図書館統計.....	6

フランス国立図書館で

永 治 日出雄

中世の王室文庫に起源をもつフランス国立図書館Bibliothèque nationaleはパリの中心部リシュリュー街に位置するが、地下鉄駅やバス停から多少距離がある。いつもセーヌ左岸のカルチュ・ラタンで宿をとるので、国立図書館へ行く際にはオペラ座の近くまで市バスに乗り、帰りには逆方向のパレ・ロワイヤル広場まで歩く。しかし、終日の検索や閲読で疲れたあと、モリエール、ディドロ、スタンダールなどの旧居が点するリシュリュー街を逍遙し、噴水と朱薔薇の美しいパレ・



フランス国立図書館大閲覧室

ロワイヤル庭園で夕暮を眺めることが、私にとって人生のささやかな喜びでもある。

史料や文献の豊かさにおいてフランス国立図書館はヨーロッパ屈指の宝庫であり、これ

を充分活用することが研究者の不可欠な条件とされる。かつて私はパリ第4大学(ソルボンヌ)でポモー教授担当の大学院ゼミ、「18世紀フランス文学演習」を聴講したが、このゼミでは修士論文作成の準備として第1週に国立図書館利用の指導が行われた。同図書館は原則として大学院在学以上を入館の資格と定め、事務局で研究者名簿に登録すると、国籍を問わず10年間有効の閲覧証を交付する。哲学者フーコーは連日ここで史料を渉猟したと言われるが、さまざまな国の著名な学者が館内で見掛けることも

珍しくない。

国立図書館が所蔵する刊行物は1200万冊を超え、360のデスクを備えた大閲覧室が、夏でも午前10時には満席となる。四方の壁面に

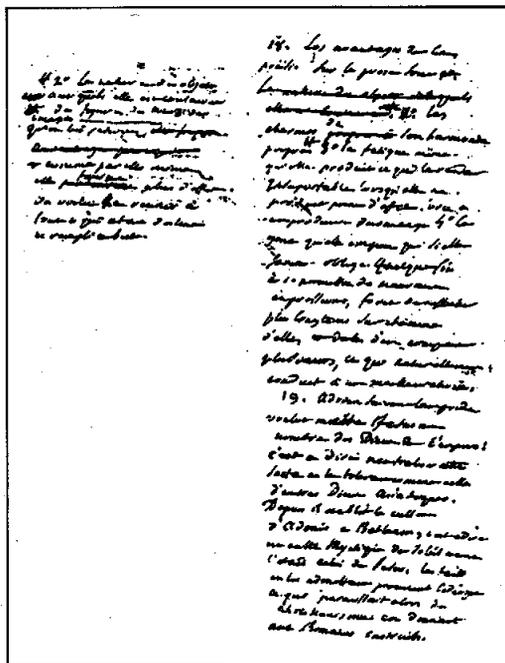
は古色蒼然たる書籍が天井近くまで積まれ、参考図書や全集類は開架として通路脇に配備されている。これらの蔵書は半世紀の歳月を費やして200巻余の目録にまとめられ、また近年納本された書物はパソコンによる検索に切り換えられた。開架以外の刊行物については、求めに応じて係官が書庫から閲覧者の座席まで運んでくれる。ただし、請求した書物が手元へ届くのは1時間ほどかかり、3冊に1冊の割合で間違った書物が渡されるか、所在不明等の回答がなされる。

なお、国立図書館には貴重書、稿本、版画、楽譜等について各々独立した閲覧室が設けられている。ここには古代エジプトのパピルス写本、シャルルマーニュの彩色挿絵付福音書抄録など蔵されるが、私の研究領域に係る史料を例示すれば、ルソー著『エミール』の初版本、ならびにルソーが所有し、書き込みを付したエルヴェシウス著『精神論』の初版本が見出される。また、ディドロ著『ロシア大学案』の自筆手稿やコンドルセ著『人間精神進歩史素描』の自筆手稿なども稿本室に保存されている。ちなみに『人間精神進歩史素描』をめぐるのは、従来定本とされたアラゴ＝オコナー編『コンドルセ全集』とこの自筆手稿との間に数多くの異文が見出され、後者の精密な検討に基づいて新しい校閲本を編纂することが、歴史学者や教育学者の課題となっている。なお、係官の監視のもとではあるが、これら貴重な史料もその場で閲覧が許される。

フランスに短期間しか滞在できない私にとって、最大の悩みは文献複写の煩雑さである。国立図書館にもクイック・コピーの設備はあるが、研究上必要な大半の文献は古文書の保護、書物破損への危惧を理由にそれを禁止されている。したがって、割高ではあるが、大抵はマイクロフィルムによる複写に依存し、請求したフィルムは日本へも郵送してくれる。とはいえ、フランス国内ですらコピーが自分のところへ届くまでに早くも2ヵ月、ストラ

イキ等で遅延すれば、ときには1年以上を要する。また、いつまでも依頼が放置され、切望した史料を入手できぬことも稀ではない。

同図書館は館外貸出を一切行っておらず、一旦確保した座席を失わぬよう、長時間外出することも控えてしまう。また、館内には休憩室も喫茶室もないので、廊下で喫煙する程度の休息ができるのみである。しかし、第2次大戦以前に刊行された原典、研究書、雑誌論文の多くは、パリにおける他の公共図書館や大学図書館では見当らず、面倒を忍んでもリシュリュー街に通わざるをえない。革命前に西ヨーロッパへ亡命したレーニンは、親切なジュネーヴやチューリッヒの図書館を愛し、フランス国立図書館の非能率や官僚主義に憤慨していたと伝えられる。リシュリュー街における閲覧と渉猟が多量の気力、労苦、忍耐を必要とすることは、現在もあまり変わっていない。



フランス国立図書館所蔵のコンドルセ著『人間精神進歩史素描』自筆手稿